スポーツと「男性性の保護区」

坂　なつこ　一橋大学大学院社会学研究科教授

本稿では、スポーツの変容を、E.ダニングの「男性性の保護区」から考察する。ダニングは、近代スポーツのいくつかの競技においては、「遊戯的闘争」や「模擬戦」という形態をとるが、それは「社会的に容認され、儀式化され、いくぶん抑制された（肉体的暴力の表現の飛び地）であるとする。そのため、「文明化」(N. エリアス)され、より平和化した社会においては、「男性性を立証する経験の主要な手段」となり得る[1)]。

スポーツとジェンダーについての研究は、フェミニズム研究等の発展とともに、スポーツにおける女性アスリート（参加者）の不平等な状況を問題化してきた。他方で、ダニングが指摘するように、それまで「近代スポーツの父権的性格、および男性ヘゲモニーの維持において果たすかもしれない役割」については、それほど疑問視されてはこなかった[2)]。そのため、ダニングは、「スポーツに存在している、あるいはスポーツによって生まれる男性優位の形態に関して、またこれに関して起こった変化に関して体系的な論理化」の企てを試みているといえる。このことは、単にこの問題を男女間の差別の問題としてのみ取り上げることではなく、スポーツという文化形態の内在的な性質について議論することの必要性を示しているように思われる。

１．文明化の過程とスポーツ

N.エリアスは、スポーツを近代イングランドに発生したある特定の身体文化・娯楽の形式が世界に普及したものであるととらえた。すなわち、「・・・競技者として、あるいは観客として、個人間やチーム間で行われる肉体的競技を楽しみ、さらに流血もなく、競技者がお互いにいかなる重大な傷害も加えないという条件の下でこれらの競技によって引き起こされる緊張や興奮」が、近代スポーツの特徴である[3)]。そのような娯楽の形式は、肉体的暴力の使用が軍隊や警察によって独占され、かつ税金によって租税を独占する社会システムのもとで成立する。そこでは、権力の交代は、議会制民主主義のもとで非暴力的に行われる。そのような社会においては、突発的な情動の変化や肉体的な強さよりも、様々な戦略、妥協、協調、長期的視野が必要である。

M.キンスキーは、不快感や差恥心の歴史的変動は文明化の現われのひとつであり、エリアスは「近代社会への政治的、社会的な変化が、それと同時並行的に複雑化する個人と個人の関係を円滑にするために、情動の制御を高めていった」ことを捉えているとする。中世ヨーロッパ社会では、「人口密度が高くなり、それに伴って人々の相互依存度も上がり、社会関係が複雑化し、政治権力の集中化が進むという近世的集権国家の出現を彩る社会条件のもとで、食事作法が占めている役割が、強化の一途をたどる情動抑制や身体表現の規律化といった視点から浮き彫りにされる」のである[4)]。

スポーツはこのような「文明化の過程」、すなわち身体表現の規律化としての行動と感情の一般的な法則とおなじ方向の発展のうえに捉えられる[5)]。肉体的暴力に翻弄されない日常の生活の安定があり、人々の情動は安定し（せざるをえないともいえる）、そうなってはじめて、人間の肉体的暴力への嫌悪感の閾値が高くなり、その方向に身体表現が規律化されることによって、娯楽においても暴力への接近は減少する。現代社会においても、例えば、ラグビーやアメリカンフットボール、アイスホッケーのような、一見肉体的接触が激しく生じる競技では、あたかも暴力が容認されているような表現がなされる場合がある。しかし、先のエリアスの引用に戻れば、競技中の肉体的接触はあ

る一定のルールの下で行われ、相手に字義通りの致命傷を負わせる（古代剣闘士のような）ために行われるわけではないのである。

一方で、人々は自己の感情を内面においてコントロールすることが必要になり、自己抑制の社会的強制力は強まっていき、内面化が一層進む。スポーツとは、そのような内外の強制力が強まる社会において、安全に情動を発散し、お互いに了解のもとで「興奮の探求」が可能な、社会における「飛び地」となるのである。近代スポーツが 19 世紀イングランドのパブリックスクールにおいて発展し、普及する過程で、競技の形式だけではなく、そのエートスは英帝国の広がりとともに世界中の植民地へと「輸出」され、「伝播」する。植民地においては、地元エリート層は支配的エートスを獲得するものとして、大衆は「奴らのゲームで奴らを倒す」ことによってその抵抗を示す場として、受容される。そのため、それは「平和化」する社会における「代替的な戦争」の側面も保持してきたといえよう。

２．男性性の保護区とその変容

ダニングは、そのようなスポーツの性質は、個人的な行動規範においては、「男性性の保護区」としての役割も担っていくと捉えた。「いくつかのスポーツ分野は・・・男性的攻撃性の合法的な表現のための、肉体的勇気や力の使用と誇示をともなう伝統的な男性のハビトゥスの生産と再生産のための飛び地を代表するようになる」のである[6]。

ダニングが捉えたのは、次の点である。第一に、社会の重要な制度が暴力の行使を承認し、実際、賛美する限り、男性の権力は強化し、反対に、社会のルールが、暴力が広くタブー視される程度に実施されれば、弱化する。また、第二に、男性が公的領域で名誉を与えられるような男性自身の制度（「男性の保護区」）を持つ限り、男性の権力は強化し、反対に、そのような制度が統合されれば弱化するとしている。例えば、狩りや農耕が主要な生活手段である場合、そのような傾向は強まるであろう。スポーツが、男性性の功績を公的に賞賛する場である限り、男性性の保護区としての機能は維持され続けるともいえる。

そのような男性性の保護区の変容を、ダニングは、男女間の権力関係とバランスの構造的な変化のもとで捉えていく。フットボールにおける暴力の研究において、ダニングは、観客が暴徒化するフーリガニズムと、ラグビーの選手文化との違いを比較している。そこでは、「乱暴な」労働者階級の暴力的な男性のスタイルのなかに表される男性的な複合物と、ラグビーのなかで表されるそれとの重要な違いが示される。ラグビー選手の肉体的暴力と頑強さはゲームの社会的に容認された手段へ向けられ、一方、「乱暴な」労働者階級においてはもっと重要な「人生を賭けた献身」になる傾向があるとする。さらに、ラグビーにおいては、儀式や歌などを通して女性を象徴的に対象化し、あざけりったりけなしたりする（ここでは、ミソジニー的なチャントや、ホモフォビア的な表現が用いられる）が、フーリガンの歌やスローガンには女性は全く現れないとする[7]。下層労働者階級においては、女性の力がより低く、従って男性にとって社会的な脅威とはならない。そのような状況下においては、「女性は実際に対象化され、大いに利用され、そして男の公然たる暴力にさらに従うことになる」のである。すなわち、同じ「男性性の保護区」であったとしても、置かれた社会的状況と男女間のバランスの違いが示される。ラグビーの例のように、女性の進出が著しい場合、その反応はさらに強く示され、「男性性の保護区」としてのスポーツ文化の有り様はいっそう強化されていくと考えられる。筆者は、アイルランドのスポーツをジェンダーの視点から分析したが、そこでは、19 世紀末から 20 世紀初頭の英帝国からの独立運動期は、アイルランド社会全体の変化の中で、男女の権力バランスの変化が生じた過程ととらえられた[8]。そこでは社会の「女性化(feminization)」＝平和化において、男性側においても、女性のスポーツを容認していく動きがみられ、それぞれの自己像の変化ももたらされた。例えば、ゲーリッ

クゲームスだけではなく、「飛び地［保護区］」として存在してきた男性スポーツ（特にラグビー、サッカー）などにおいて、反発や葛藤を含みつつも女性プレーヤーの存在が容認されていく。また、女性のスポーツへの進出は、選手から徐々に既存の組織での事務、メディカル、コーチ等と組織それ自体への統合が見られるようになる。

３．スポーツにおける「男女差」

以上のように、スポーツが男性性の保護区としての機能を維持しているのは、男性性のアイデンティティの生産と再生産の主要な場であるからである。しかしながら、ダニングは、それについてはスポーツは二次的な重要性しかないと述べている。より重要なことは、「男女間の権力の機会と、男女の必然的な相互依存の内部に存在している性的分離の程度に影響を及ぼすあのより大きな社会構造の諸特徴であるように思われる。これに関連してスポーツが成すと思われることはただ、二次的で補強のための役割を果たすことである」のだ[9]。とはいえ、スポーツは、男女間の身体的格差を象徴的に表象し、意味づけを行っていく文化装置であるといえる。近代社会は、「〈男らしさ〉や〈女らしさ〉というジェンダーの構造が、それまで以上に強調される社会の誕生でもあった」とされるように、生産手段における性差が明確ではなくなるからこそ、「男女差」がよりいっそう強調されてきたといえるだろう[10]。

近代産業社会においては、近世までの男女の相互補完的関係が崩壊し、男性による産業労働（生産労働）・「公的」労働・有償労働、女性による家事労働（非生産労働）・「私的」労働・無償労働という傾向が強まる。近代スポーツにこの論理が当てはめられることによって、「(一流の）男性アスリート」対「二流の選手(スポーツの苦手な男性)／女性」という構図が作られる。そのためスポーツはジェンダーバイアスを可視化するのである。スポーツ競技においては、速さや強さを競う競技と、表現系とみなされる競技に分類される。表現系は「女らしい」競技とされるのである。しかしながら、西欧先進諸国においては、女性のスポーツへの進出は、ウーマンリブや女性の権利獲得運動のもと、広がりを見せる。他方、日本においては、同様に選手等も見られる一方で、女性マネージャーという独特な進出の仕方をみせた。高井によれば、「女子マネージャー」とは、1960 年代に登場するが、男性の領域を侵すことなく、スポーツ（男性の領域）に女性の位置づけを確保というものであった[11]。

このような有り様も、種々に変化が見られる。オリンピックにおける新競技への進出は象徴的であろう。以下、女子種目の採用年を列挙する。マラソン（1984 年)、サッカー（1996 年)、レスリング（2004 年)、ボクシング（2012 年)、スキージャンプ(2014 年)などが見られる。多くの場合、オリンピックに採用されるのは、世界選手権など各種競技会の後であり、例えば、女子スキージャンプの場合、2009 年には世界選手権が開催されている。日本においては、2011 年の FIFA ワールドカップにおいて女子チームが優勝した際に、監督（男性）と選手（女性）とのフラットな関係が注目された。以上のことはジェンダーバランスの変容としてとらえることができよう。

女性の男性スポーツへの進出だけではなく、女性スポーツへの男性の進出についても見ることができる。例えば、シンクロナイズドスイミング、エアロビクスや新体操などへの男子の参加があるが、これらは、単に参加の平等が確保されたと考えるだけではなく、女性的スポーツ、男性的スポーツといったジェンダーバランスの変化を捉える必要があるだろう。このような変化には、スポーツそのものの変化が内在しているような動向も生じている。最後にその点について概観する。

多様なスポーツ的身体文化の出現

これまでも、近代スポーツにおける競争原理や攻撃性に対抗する新しいスポーツの有り様はみられた（例えば、トロプス、ニュースポーツ、カリ

フォルニアスポーツなど)。近年、それへの希求はますます大きくなっているように思われる。競争や勝敗は決定されるが、技の個性や奇抜性などのパフォーマンスがより重視されたり（Xゲームス)、身体運動そのものの喜び（パルクール)、より条件の厳しい環境での競争や「興奮の探求」(エクストリーム系）が追求されるなど、近代スポーツの要素を大きく逸脱するような有り様がみられる。また、障がい者が参加するスポーツをみてみると、アダプティッドスポーツにおいては、健常者／障がい者という区別をつけない参加の仕方も追求される。そこでは、近代スポーツにおける、モデルとなる「身体」そのものの有り様が問われることになるのである。また、超人スポーツと呼ばれる、最新の機器を使用することによって、障がいや男女差、年齢等をフラットにして参加する競技も開発されている[12)]。

近代スポーツは、常に「男女差」を表象してきたが、それを変化させる動きもある。テニスやバドミントンなどにおける男女ペアによるミックス競技は従来から存在するが、トライアスロン、あるいは陸上競技などに男女混合の種目が採用されてきている（ニトロアスレティクスなど)。性的マイノリティが参加する競技としては、ゲイゲームスなどがあるが、「男女」というカテゴリーを相対化するような動きとして注目される。

以上のような動きは、近代スポーツの範囲で行われてるのか、拡張と捉えられるのか、近代スポーツを越え出でるものであるのかについては、今後多様な角度からの検討が必要であろう。

「男性性」として優遇されてきた身体の有り様は、女性だけでなく、例えば「スポーツが出来ない男性」や障がい者の身体を疎外してきたのであり、近年では、性的マイノリティとスポーツとの関わりも焦点化されてきつつある。近年の医学や生理学、遺伝学等の発展により、人類の身体の捉え方は変化を余儀なくされている。また、身体活動を補助する用具や機器（インターネットなどのソフトも含め）における科学技術の発展も、スポーツ実践や概念を変化させてきたといえるのではないだろうか。社会における身体の有り様は、スポーツが誕生した 19 世紀末の時代から大きく変容している中で、スポーツが、どのような身体文化となるのか、多方面から検討することが必要であろう。

【注】

1）E.ダニング『問題としてのスポーツ』法政大学出版局、2004 年、407 頁。

2）N.エリアス『スポーツと文明化』法政大学出版局、1995 年、393 頁。

3)『スポーツと文明化』、28 頁。

4）M.キンスキー「礼は飲食に始まる―近世日本の作法書をめぐって―」『京都大学人文學報』86 巻、2002 年、99 頁。

5)『スポーツと文明化』30－31 頁。

6)『問題としてのスポーツ』407 頁。

7)『スポーツと文明化』415 頁。

8）拙稿、「スポーツにおけるジェンダー関係の変化：アイルランド・ゲーリックゲームス」『ジェンダーと社会』木本喜美子・貴堂嘉之編、旬報社、2010 年。2016 年は、1916 年のイースター蜂起から 100 周年となり、独立運動期の研究が進んだが、戦闘における女性の役割についても再解釈が進みつつある。

9)『スポーツと文明化』415 頁。

10)『ジェンダー学を学ぶ人のために』富士谷あつ子他編著、世界思想社、2000 年、119 頁。

11)『女子マネージャーの誕生とメディア』高井昌吏、ミネルヴァ書房、2005 年、参照。

12）拙稿、「超人スポーツが提起する新しいスポーツの地平」『一橋大学スポーツ研究』35 巻、2016 年。